

2023年7月30日 久宝教会 聖霊降臨節第10主日礼拝メッセージ

「姉の名、妹の名」

岡嶋千宙伝道師

聖書 創世記 29章 15-20節

先週も、でしたが、今週はそれよりも一段と暑く感じられます。実際、先週日曜日以降、その前の週に比べて気温が上昇し、それまでにも何度かあった35度越えの猛暑日が、日々、連続して記録されるようになっていきます。少しでも暑さが和らいでくれればと切に願うのですが、残念ながらその兆しはありません。この先も厳しい暑さが続くとの予報で、わたしの住んでいる奈良では、この先の一週間、毎日、最高気温35度越えになるとのことでした。本当に暑い。日本だけではなく、世界の各地が、かつてないほどの暑さに襲われています。ヨーロッパ、アジア、アメリカでは観測史上過去最高の気温が記録されていて、中には40度を越える地域もあるとのこと。地球温暖化の影響を、ごく身近なところで、目に見える形で、ひしひしと感じられるようになっていきます。暑さが続く日々。「続く」ということと言えば、本日の御言葉も「続き」です。先週からの続きで、ヤコブの物語。先週は、ヤコブが長い旅の途中で見た夢の話をもとに神のメッセージを聞きました。今週は、夢を見たあとのヤコブが旅を続けていったその先のこと。旅の目的地であるハランの地にたどり着いたヤコブをめぐる出来事を描いた箇所です。旅を終えたヤコブは、誰とどのように関わり、生活していたのか。その関わりを通して、神はヤコブに何をもたらしたのか。神・ヤコブ・ヤコブに関わる人たち、その関係性の中から、神はわたしたちにどんなメッセージを示してくれるのか。御言葉から引き出される神のメッセージを、今しばらく、皆さんと共に味わってみたいと思います。

先週の御言葉で夢を見たあとも旅を続けていたヤコブ。どのくらいの期間であったのかは記されていませんが、直線にして約600キロの距離で、しかも徒歩での移動なので、相当な長い期間だったはず。あるいは1ヶ月近くかかったのかもかもしれません。その長い旅を終えて、ヤコブは無事、目的地であるハランの地へとたどり着きます。ハランの地にある、とある野原でヤコブは、井戸のそばで羊の群れを世話していた一行に出会いました。その中には、ヤコブの伯父ラバンの羊の群れを連れていたラバンの娘ラケルがいて、ヤコブは彼女に、自分は彼女の父の妹レベカの子どもであることを伝えます。それを知ったラケルは、父ラバンを呼びに行き、甥ヤコブと出会ったラバンは、ヤコブを家族同様に迎え入れました。長旅の末、目的地にたどり着いたヤコブは、ようやく、安らぎの場を見つけることができたのです。ヤコブがラバンのもとでどんな暮らしをしていたのか、詳細は記されていません。ですが、文脈からすると、おそらく、伯父ラバンの羊の世話をしていたのだと思われます。ラバンが、自分のために働いてくれるヤコブに、「労働の対価、報酬はほしくないか」と聞くと、ヤコブは「娘のラケルをくれるのなら、そのために7年

間働くこと」を約束し、ラバンも同意します。愛する人を迎えるために懸命に働くヤコブ。いつの時代も愛の力はすごいのでしょう。好きな人のためならどんな労苦も厭わないという思いで働くヤコブにとって、約束の 7 年間は、あっという間、「ほんの数日のように」(20 節) 過ぎていきました。

ここまでが本日の御言葉の内容で、ここで終えるのなら、この箇所を、一人の男性の甘い恋心を描いたラブストーリー、と捉えることもできるでしょう。ヤコブという一人の男性が、一途に一人の女性、ラケルのことを思い続け、労苦をもろともせずにその恋心を、愛を貫く。このまま、すんなりラケルと結婚できたのなら、文句の付けようもないハッピーエンドです。ですが、ドラマやアニメなど、巷に溢れるラブストーリーが教えてくれるように、愛に障壁はつきものです。ヤコブの恋物語も一筋縄ではいきません。ヤコブは、かつて、自分の身内である兄エサウを 2 度にわたって騙し、それが理由で命を狙われるようになっていたのですが、その報いと思えるような仕打ちを伯父のラバンからされることとなります。7 年間働けば、ラケルを結婚相手として迎えられるという約束が交わされていたのですが、その約束の 7 年間で過ぎたあと、ラバンがヤコブに嫁がせたのはラケルではありませんでした。ラバンは、ラケルの姉をヤコブに与えたのです。ヤコブが愛していたのは、姉のレアではなく、妹のラケルでしたから、ラバンの仕打ちに納得がいきません。ヤコブは再度ラバンと交渉し、ラケルを結婚相手として迎えるためにさらに 7 年間働くことを約束します。はじめの 7 年間と同様、今度も愛の力で二度目の 7 年間を乗り越えたヤコブは、実に合計 14 年間でラバンの下で働き、ようやく意中の人ラケルと結婚することができたのでした。山あり谷ありの恋物語がこうして一つの結末を迎えます。ヤコブの視点からすれば、紆余曲折はあったとは言え、この結末は結果的には良いものでした。先週もお話したように、そもそもヤコブが伯父ラバンのもとへと旅を始めたのは、結婚相手を探すためでした。ヤコブは父イサクと母レベカから、伯父ラバンの娘たちの中から結婚相手を探すようにと言われていました。ラバンにはレアとラケルという二人の娘がいて、そのどちらもがヤコブに嫁いでいます。ですから、そこに至るまでの過程は別にして、結果としてラバンの娘の中から結婚相手を探す、という目的は達成されたこととなります。さらに先週見た夢の中で、神は、ヤコブに子孫を与えて、その子孫を「地の塵のように」増やす、という祝福の約束をしています。ヤコブは、後に、結婚相手として迎えたレアとラケル、さらにそれぞれに遣っていた召し使いジルパとビルハの合計 4 人の女性との間に、13 人の子供をもうけます。そのうちの 12 人の男の子から、さらに多くの子孫が生まれ、その子孫たちは、やがて、神がヤコブに約束した土地に住むようになるのです。

旅の目的が達成されて、しかも、約束された神の祝福がもたらされているのだから、それで良いではないか。そう考えることもできます。ですが、ここで留まるわけに

はいきません。もう一步踏み込んで、その祝福の背後に何があるのか、何が起こったのか、あるいは、祝福を記す聖書の言葉は何を前提とし、何を見落としているのかも注目する必要があります。本日の御言葉の前後、ラケルとレアが登場する場面の前半部分、29章1節から30節までの間、そこにあるのは、完全に男性の視点です。ラバンの娘であるレアとラケル、そして、それぞれの召し使いジルパとビルハという、名前の記された4人の女性たちが登場していますが、彼女たちは誰一人、言葉を発していません。語らないどころか、彼女たちが、ヤコブをめぐる結婚劇の中で、どんな思いを抱いていたのか、一切記されていないのです。百歩譲って、それは、あまり重要な役割を担うのではないマイナーキャラクターだからというのなら、理解できなくもありません。ですが、4人の女性たちはマイナーキャラクターではありません。彼女たちは、今後のイスラエルの歴史が展開されていくなかで、主役となる12部族の先祖を産んだ女性たちです。イスラエルの歴史を語る上で彼女たちは無視できない存在です。それなのに、4人の女性の誰一人、自分の身に起こる重要な事柄、結婚ということについて、口を挟むことが許されていないのです。すべてが男性、ここでは、ヤコブとラバンの思いのままに決められていきます。女性たちは、物言わない、受動的な存在です。ヤコブは、自分がラバンのもとで働くことの「報酬」としてラケルを「与えてくれ」とラバンに交渉し、ラバンもそれに応じ、最終的には約束の2倍の期間、14年間ヤコブが働いたあと、その見返りとしてラケルと姉のレアをヤコブに「与えて」います。18節と20節には「愛する」という言葉が用いられていますが、愛するのは男性のヤコブのみで、ラケルがどう思っていたのかは一切記されていません。さらに、ヤコブの愛が何に基づくものだったのか、明確には記されていませんが、17節の記述からすると、それは、「容姿が美しかった」からだと推測されます。男性の愛の対象であり、しかも、その愛は、その人の性格や内面などの人間性ではなく、姿・形、などの見た目に基づくもの。先程、神の祝福の一つが、子孫が増えることである、と語りましたが、それゆえということもあるのでしょう。女性はいかに多くの子どもを産むかということによってその人の価値が決められています。子どもを、男性にとっての子孫を残すということを通して、社会に貢献すると考えられている女性たち。だからでしょうか。それまでは沈黙させられていたレアとラケルは、ヤコブの子どもを産むという段階になると、俄然と自分たちの声を発するようになります。一方で、子どもを産むことのない女性については、名前すら記されていません。レアとラケルには、母親がいたはずですが。それなのに、一連の記述の中で、その母親、ラバンの妻、ヤコブにとっての伯母については一切語られていないのです。もちろん、地域・時代の違いはあります。そのために、文化的背景や価値観にも違いが出てくることは大いにあり得ることです。だから、現代の価値基準で「悪い」と判断される事柄があるからといっ

て、過去の時代や異なる地域の様々な慣行や風習、価値観を批判することはできません。また、今の価値基準に基づいて、「聖書は信じるべきではない」「旧約は真の聖書ではない」「この箇所は御言葉としてふさわしくない」などと言うこともできません。ここで強調したいのは、聖書全体、すべての箇所を、神の御言葉として受け止めた上で、その中にある欠け、不備の部分を、今を生きるわたしたちの欠けや不備を明るみに出す言葉としてとらえ直していく必要がある、ということです。ヤコブ、レア、ラケルたちから 3000 年以上経た時代に生きるわたしたちもまた、女性に限らず、誰かを、一人の人としてではなく、一つのモノとしてとらえるようなことがあるのではないのでしょうか。単なる報酬としてしかとらえないことがあるのではないのでしょうか。見た目などの一つの価値基準だけで判断していないのでしょうか。誰かを、自分たちの利益になるとときには名前呼び掛けるけれど、それ以外の時には、まるでそこにいないかのように無視している。そんなことはないのでしょうか。当然と思われている事柄、これが社会の中での祝福とされている事柄の背後で、抑圧されている声、なきものにされている思い、言葉、名前、そして、磨り減らされている命の灯火があるのではないのでしょうか。確実にあります。だからこそ、当然の背後に目を向ける。

自身が生きる時代や、生活する地域の文化の影響を受けながらも、当時の社会で「これこそが神の祝福を受けるにふさわしい」と思われている事柄の背後に目を向けた人がいます。新約に証しされているイエスです。イエスは、当然の背後にある世界に自ら足を踏み入れ、そのような場に生きる人々と共に歩み、その場にこそ神の祝福が訪れるということ、身をもって示した人でした。祝福を受けることができない汚れとされた病を持つ人たちのところに赴き、その身体に触れ、その人たちとの交わりの中に生きたイエス。罪を犯したとされる女性と語り合い、その罪を糾弾する人たちにこそ、いたらなさがあるのではないかと問いかけたイエス。嫌われていた職業についていた人々と共に旅をし、共に食卓を囲んだイエス。その姿にならって、わたしたちもまた、この社会で当然とされている価値観の背後で忘れられている人たちの存在に目を向ける必要があるでしょう。日雇い労働に従事する人たち。様々な障害を持つ人たち。多数とは異なるあり方の性を生きる人たち。外国籍の人たち。そして、ヤコブたちの時代から 3000 年以上経ったあとも、今なお抑圧され、モノ扱いされる女性たち。一人ひとりの存在と声に寄り添っていく。世の中で名前すら呼ばれることのない人たちと共に歩み続けていく。そのために、世の中の当然をいったんカッコに入れて、その背後にあるものをしっかりと見つめていく。そこに取り残されている一つ一つの思いを拾い上げていく。その思いに耳を、全身を傾けていく。そんな一歩を踏み出す一週間を、みなさまと共に、イエスと共に、過ごして参りたいと願います。